

神様に甘えたくて

「どうしたお前、元気を出さぬか」

満面の笑みを浮かべた大黒天像から、そう言われている気がした。

ここは出雲大社の中にある彰古館。境内の片隅で神社の宝物を守り続けてきた、二階建ての資料館だ。100年の風雨にさらされたスギ材の板壁は、冬枯れした葦原を思い出させる灰がかった色をしている。

一階には地元の人たちから奉納された大黒天像がズラリと展示してある。出雲大社に祀られている大黒

主命のもう一つの姿が「大黒さん」。

打出の小槌を持って大きな袋を担いだ、陽気な神様だ。真新しい、煤けた、黒肌の、赤肌の、いろんな姿の大黒さんたちが奉納者の名札と並んでいる。底抜けの笑顔で四方から浴びせられると、どんなにダメな自分も受け入れられているようで、涙腺がホッとゆるんでくる。

有名な神社に一度は参拝してみよう、と思いついたのが三年前。高速バスの窓から宍道湖を見て「あ、こ

の景色、見たことある」。鳥根に足を踏み入れたのは初めてだったのに、そんな気がしなかった。神社の穏やかな空気や町の人たちの柔らかい話し方、遠くの山々にさえ親しみを覚え、訪れるのはもう三回目。「とうとう結婚を焦りだして神頼みか」と、身内は思ったようだが。

彰古館の二階、展示台の間にスタッフが座っている。最初は静かな気配と一体化して気づかなかった。見学者が来ると彼は不自由な足を杖で

支えて立ち上がり、展示物のいわれ

を語り出す。発掘された勾玉の話題になったので、

「私も持ってます。石を集めてて」

と相づちを打った。すると

「あなたも好きなんですね」

と、仲間に会えたような笑みを見せてくれた。

手水舎ちゅうずやの前を通り掛かると、中学生の集団が元気に挨拶してくれる。不意を突かれてもごもごと挨拶を返したが、後で自分が可笑しくなった。真っ直ぐな声をかけられると、こちらの背筋も伸びるようだ。

帰りの一畑電車の改札口で駅員さんに乗り換え駅を尋ねる。出発時刻まで時間をつぶしてから乗客の列に並んでいると声をかけてくれた。

「ああ、間に合いましたね」

出雲では、食べ物屋さんでもお土産屋さんでも、きつと自分の仕事が好きなんだろうと思う人たちとよく出会う。よそよそしくも馴れ馴れしくもなく、温かい。一人旅でも寂しいと感じたことがないのは、この心地よい距離感のおかげだ。

丘の上に立つ鳥居の前からの眺めは、高い山に登ったわけでもないのに空を広く感じる。この町の建物のサイズ感が程よいからだろう。気がつけば、「観光客」ではなく、町に溶け込んでくつろいでいる。

出雲は、神様が同じ目線に立って笑いかけてくれる場所。その懐に甘えたくて、何度も帰ってくるのかもしれない。



出雲大社の大しめなわ、実物は想像以上に大きい